



TITLE:

花山だより(六月)

AUTHOR(S):

星見山人

CITATION:

星見山人. 花山だより(六月). 天界 1934, 14(160): 374-374

ISSUE DATE:

1934-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166859>

RIGHT:

花 山 だ よ り (六 月)

今月は新らしく臺員として3名が來臺され、急に賑やかになった。即ち塚本義一氏は1日から、自宅八日市より毎日通はれ、是澤三郎氏は7日より宿舍に泊り込みで、何れも志願助手として種々の研究を始められる。又、た8日の採用試験に合格した給仕龜嶋武君は11日より通勤、目下、栗鼠の様にすばしこく駆け廻つて働いてゐます。

2日15時から、ブラジルに居られた高木義一氏の「ブラジルの話」を聞く。吾協會ブラジル支部神屋氏御宅の直ぐ近くに住つてゐられた由。珍らしい話が續いて時の経つのも忘れる。尙ほ、此の話の途中で、山本・稻葉兩氏は高松宮兩殿下倉敷天文臺行啓奉迎のため退席する。1日置いて4日14時より理學士能田忠亮氏の「漢書に見えたる五星聚于東井を論じ、併せて秦の改時改月説に及ぶ」と題され、支那天文學に關する蘊蓄を述べられた。此の日は東方文化學院の島本氏も來聽された。尙ほ、同日17時より寫眞講習會が先月よりの續きとして開かれた。此の講習會は次の11日を以て完了した。今月の常識講座は四月の豫定を其のまゝに、駒井卓博士の「遺傳の話」が16日に開かれた。或る遺傳要素は染色體の何處の所にあると言ふ事まで知れてゐると聞かされて驚く。丁度、一般人が「何萬光年の彼方」と言ふので驚くのと同じ様な事であらう。

18日は本學創立37週年記念日として學内開放、花山天文臺も公開する。準備は以前から進められ、前日の日曜日にも特に集つて、すっかり出來上る。大體の道順は(1)本館、地下室北入口より廊下を見て寫眞原板陳列棚、圖書室で幻燈、無線室、大ホール、露臺より外へ出る。(2)子午線館は外から見る丈で、西端の準備室には協會の賣店が出て、繪葉書等賣る。(3)46糎カルバ1、是丈を見せる。尙ほ(1)と(2)の間に稚兒ヶ茶屋の出張店が出來た。參觀者總數は約二千名位かと思ふ、丁度好晴で大黒點が現はれたので、30糎で投影して見せた。公開時間は9時30分より17時30分までであつた。23日は協會の例會。夜は曇天であつたが公開し、50名程に雲を通して月等見せる。

18糎赤道儀微動裝置故障で5日及び先月31日に西村製作所より來てもらつて修理する。ポンプが14日故障を起し、翌日までかゝつて營業課で修理して呉れる。9日山本教授は日食會議のため東上。同教授夫人より頂戴のハムレット劇招待券で一同觀劇。14日は山本教授移轉、新御宅にて27日夜宿舍委員會合する。

(星 見 山 人)